荒尾市立府本小学校　校長便り　№３２

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和７年９月８日(月)

少し過ごしやすくなってきたでしょうか。日中暑いのですが、朝晩、涼しく感じる私です。

「〇〇の秋」という言葉の通り、秋は何をするにも良い季節です。しかし、あれもこれもと考えていると何もできなかった…、なんてことにもなりますから要注意です。計画性が重要ですね。

私は自分の仕事を幾つか並行して行うようにしています。業務と業務の間に隙間ができるからです。この隙間をなくすことで無駄な時間を省いていくのです。隙間を計画的に埋めていくことで、自宅にいる時間はゆったり過ごすことを心がけています。

【独り言】こんなに感動的なことはない！「新しいことへの挑戦」と「みんなで挑戦」

先日、２４時間テレビを見ていて思った。新しいことや集団で何かに取り組むことは、当事者も見ている人も感動するということを。挑戦することにはそれなりのエネルギーが必要である。そのエネルギーを使うことに対して億劫になり始めたら精神的に老いているのではないだろうか。仕事でもそうだ。前例踏襲は楽だが、進化はない。それどころか停滞は後退といっても過言ではない。

新しいことへ挑戦することは、精神と肉体を若い状態に保つ。理由は簡単だ。楽しいからである。この楽しさを忘れることが老い”なのだ。新しいことに挑戦しようとしている人とそうでない人とでは、醸し出す雰囲気が明らかに違う。そして、自然とチャレンジ精神の旺盛な人達は集まり、何か新しいことへ集団で挑戦し始める。これがプロジェクトとなり、集団の質を高めるための大きな流れとなる。逆に、チャレンジ精神のない人や仕事をしたがらない人たちはマイナスのオーラを放っているので、自然と挑戦する集団からは距離を取られるようになり、新しい価値や文化を生み出すことなく、大昔のルーティンを続けていくことになる。そのような人や集団は毎日の生活も苦痛であろう。

私はこれまで、勤務校において「自治的集団づくり」を目指した「42、195㎞強歩会」と「リレーマラソン」を行った。この取組は単純に体を鍛えるということではなく、心と体を鍛え、仲間が親しみあい助け合い、協力して一つの目標に向かって突き進む取組であり、集団づくりであり、児童一人一人の居場所づくりの取組である。この取組は、クラスの仲間を含めた参加者全員と協働する掛け替えのない時間となった。

我々は教師として、このような取組を提供しつつ、活動の当事者でもある。児童一人一人と一体となって同じ方向へ進み、目標が達成された時に大きな感動を味わうことができる。また、その活動を見ている周囲の人々、つまり保護者や地域住民も同じ感動を味わうことができる。自分を重ね合わせることによる疑似体験と、「一生懸命」から感じる感動だ。テレビを見ていて感動して涙するようなことと同じである。

秋は行事が多いが、各学級学年ではプロジェクトを立ち上げ、自らの目標に向けて活動を開始するはずである。それぞれが与えられた仕事を確実に遂行し、その集合体が目標達成となる。私たちはそのために支援を行い、喜びを一緒に味わいたい。

シリーズ「自分を語る」#32

３月下旬、一本の電話が…。

採用の連絡がきたのは平成２年の３月２５日日曜日でした。当時のメモ帳にメモしていました。何か複雑でしたよ、この時は。何故かというと、小学校に採用されなかったからです。臨採の１年間で出来なかったことを思う存分やりたかったのです。更にいうならば、当時の私は「差別心」の塊だったのです（後述）。

採用の連絡を頂いた赴任先は、県下唯一の病弱養護学校（黒石原養護学校）でした。（現在は支援学校となっています）今は特別支援教育というと、教職に就く者であれば誰もがその視点に立った教育活動を展開していかなければなりません。それができなければ、現代の教職の現場ではやっていけないでしょう。当時も「障がい児教育は教育の原点」という言葉があったのですが、当時の私にはそんな意識は少しもなかったのだと思います。私のそんな考え方が変わっていくためには、とても長い時間がかかりました。学級経営を何度も経験し、一人一人のニーズを把握することで学級が上手くいくことを知り、徐々に変わっていったのです。黒石原での経験は、私にとって必要な経験だったのだとしみじみ思います。経験できなかったら今の自分は無かったとも言えます。特別支援教育はオーダーメイドの教育、まさに原点の教育です。

黒石原での１学期、私は何となく時間を過ごしていました。無駄な時間です。まさに帳面消しのような毎日です。「３年我慢して、小学校へ異動だ。」なんて本気で考えていました。でもその考え方が変わる転機が訪れます。

１学期が終わり、私は帳面消しの毎日からしばし解き放たれました。学生時代の仲間と遊んでばかり…。あっという間の夏休みでした。夏休みが終わる数日前に、一応担任として電話でもしようかな？と電話をしてみました。お母さんからの一言、

「今入院していまして……、今日明日が峠です。」

ショックで、立ち眩みがしました。俺は何をしていたんだと、自己嫌悪で叶きそうでした。それから毎日、熊大病院の集中治療室に通いました。当時は罪滅ぼしだと思って始めたＩＣＵ通いでしたが、実はこれが大事なことなんだと気付かされることになりました。不思議なもので、ご両親が心を開いてくださるきっかけになったのです。それからは、仕事に対して、教え子や保護者に対して、「真摯に向き合う」を忘れないようにするようにしました。それからの黒石原での時間は私に様々なこと教えてくれました。当時の学びは、今の私の教育活動のベースとなっているものばかりです。この子？は現在４３歳、今でも付き合いがあります。彼が退院してからはよく彼の家に泊まりに行きました。というのは、お父さんはお酒が好きで、飲み仲間として私を弟のように可愛がってくれていたからです。ＩＣＵに通い詰めたことが良い方向へと働いていました。遊びに行っても子どもの事はお母さんに任せて、お父さんと私は飲んで笑ってのどんちゃん騒ぎでしたから、次の日は二日酔い状態で、心配したお母さんが学校まで私を送ってくれることもしばしばでした。大らかな時代でしたが、今もその視点は大切にしています。

２学期のある日、黒石原の一人の子どもは身をもって私に大切なことを教えてくれました。それは、教職生活の中での最大の学びです。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）